校長室だより～燦燦～ №５４２

４月

2022.4.21

３月１１日の卒業式から１か月以上が経過した。野田中学校を巣立っていった卒業生の皆さんは、新しい生活に慣れてきた頃だろうか。楽しくやっているだろうか。友達はできただろうか。イメージしていたものとの違いに戸惑ってはいないだろうか。

私のことなので、もうだいぶ昔のことになる。時代も状況も今とはだいぶ違う。だが、根本的なところは変わっていないように思う。私は、期待に胸膨らませて高校に入学した。だが、その儚い思いは、すぐに打ち消された。

まず、数の多さに圧倒された。学年の人数も多いが、クラスの人数も多かった。私のクラスには、同じ中学校の生徒はいなかった。すなわち、独りぼっちからのスタートだった。この状況に加えて「応援団講習」というものが入学早々始まった。私には、何の事前知識もなかった。先生がこわいのではなく先輩がこわかった。とんでもない所に来てしまったと思った。

授業が始まった。すぐについていけなくなった。予習をしていかないとついていけない。理解できない。中学校とは全く違った。すぐにお客さんとなってしまった。家庭で勉強をする習慣がない私には辛かった。焦りばかりが日に日に大きくなっていった。

こんな調子なので、高校１年生の４月は地獄のようなものだった。楽しいことなどなかった。私が描いていた高校生活とは全く違った。それでも、部活動だけが心の支えだった。だが、こちらもイメージとは違っていた。練習はするのだが、ちゃんとしていないというか、弱かった。こんな練習で強くなるのかという疑問を抱きながら練習をしていた。

結局、高校生活のスタートでのつまずきは、ずっと尾を引くこととなった。挽回できなかった。そのくらい私にとっては強烈だった。今振り返っても、私の高校生活はバツである。暗黒とまでは言わないが、その後の人生に大きく影響した。

何事もスタートが肝心である。スタートダッシュとまでは言わないが、スムーズなスタートでありたい。高校生活をスタートさせた卒業生たち、小学校から野田中学校に入学した生徒たちにとって、この４月がいいスタートであることを望む。

私は、この希望に満ち溢れた４月が好きだが、自分の高校生活を振り返ると、ほろ苦い思いになる。同時に、多くの高校生や中学生にとっての４月にも思いが及ぶ。「みんな大丈夫だろうか。高校時代の私のようにはなっていないだろうか」と。４月は大切な月である。